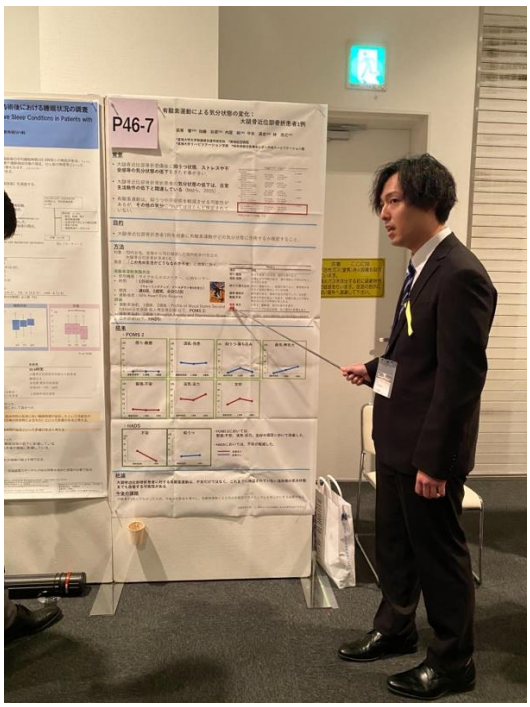
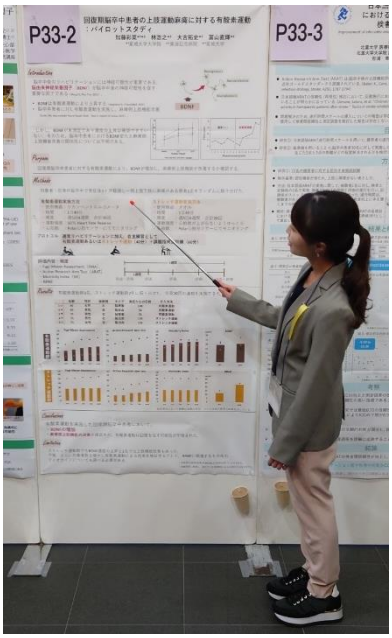
星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 11 月 26 日		
氏名	大井 慶太	指導教員名	山田 和政
掲載内容（ ☒学会研究発表　☐講演講師　☐その他 ）※いずれかにチェック			
学会等開催日：	2024 年 11 月 23 日 ～ 2024 年 11 月 24 日		
学会等名称：	日本転倒予防学会第 11 回学術集会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	佐賀県佐賀市 SAGA アリーナ		
研究・講演タイトル：	寄り添いロボットが重心移動距離と姿勢安定度評価指標および主観的安定感に与える影響		
発表者名（全員記載）：	大井 慶太，山田 和政		
研究概要 （150 字程度）	本研究では，寄り添いロボットの使用が重心移動距離，姿勢安定度評価指標（IPS），主観的安定感に与える影響を検証した．本機器未使用時と比較し使用時で右方と後方の重心移動距離，IPS は向上したが，主観的安定感に差はなかった．本機器は未使用時と同等の安定感で，安定性限界域に近い状態までバランス負荷を課すのに有用であると報告した．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	質疑応答を通して，結果の解釈に曖昧な点があったので再度検討していきたい．また，本学会の他講師の講演資料の中で寄り添いロボットの紹介が散見されており感銘を受けた．利用者にとって，本機器を用いて有益な介入効果が得られるよう，今後も検証を続けていきたい．		
写真添付欄 2 枚以内			

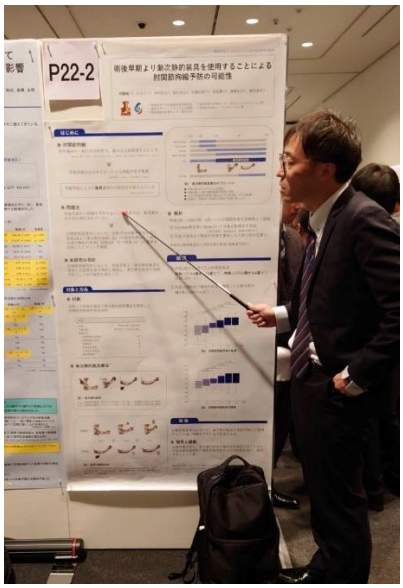
星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 11 月 12 日		
氏名	荻原　響	指導教員名	林　浩之、中谷　直史
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）※いずれかにチェック			
学会等開催日：	2024　年　11　月　1　日　～　2024　年　11　月 3　日		
学会等名称：	第 8 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	日本、岡山県、岡山コンベンションセンター		
研究･講演タイトル：	有酸素運動による気分状態の変化：大腿骨近位部骨折患者 1 例		
発表者名（全員記載）：	荻原　響、加藤　彩菜、内屋　純、中谷　直史、林　浩之 ※発表者は一番前に記入し，自分に下線		
研究概要 （150 字程度）	本ケースレポートでは、受傷から 76 日経過した大腿骨近位部骨折患者 1 名を対象として、有酸素運動がどの気分状態に作用するか確認することを目的とした。検証の結果、有酸素運動は、これまでに検証されていない活気-活力、友好等の気分状態までも改善する可能性があることを確認した。		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	学会発表を通じて、全国の療法士、医師と交流する機会を得た。発表内容に関しては、有酸素運動の実施の背景や課題など、貴重な意見をいただく事ができた。今後、さらに先行研究を確認し研究に活かしていく。		
写真添付欄 2 枚以内			

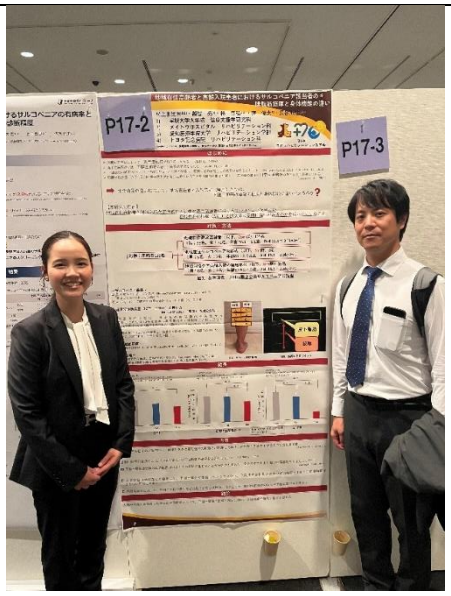
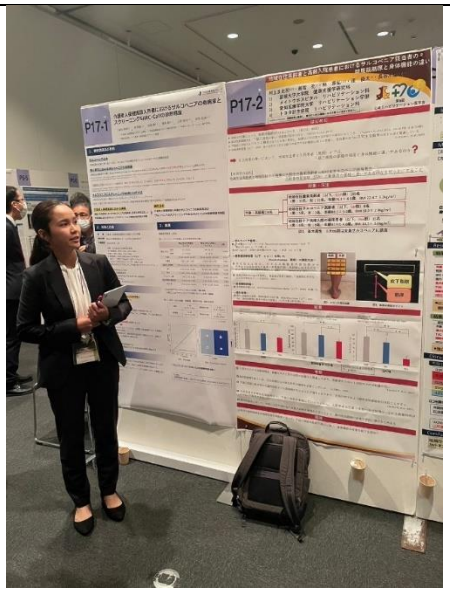
星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 11 月 8 日		
氏名	加藤　彩菜	指導教員名	林　浩之
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）※いずれかにチェック			
学会等開催日：	2024　年　11　月　1　日　～　2024　年　11　月　3　日		
学会等名称：	第 8 回日本リハビリテーション医学会　秋季学術集会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	岡山県，岡山コンベンションセンター		
研究･講演タイトル：	回復期脳卒中患者の上肢運動麻痺に対する有酸素運動：パイロットスタディ		
発表者名（全員記載）：	加藤　彩菜，林　浩之，大古　拓史，冨山　直輝 ※発表者は一番前に記入し，自分に下線		
研究概要 （150 字程度）	本パイロットスタディでは，発症から 3 ヵ月経過した脳卒中患者を対象に有酸素運動を行うことは，血中 BDNF 増加と上肢麻痺機能の改善に効果的であるか，対象群を用いて比較することである．結果は両群において，血中 BDNF は増加した．上肢麻痺機能は有酸素運動群がコントロール群に比べ機能は改善した．今後，さらに対象者数を増やし有酸素運動による効果を検証していく．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	学会参加および発表を通じて，BDNF に関する情報交換の機会を得た．BDNF はまだ明らかにされていないことも多いが，病気を改善させる重要な因子であることが確認できた． 今後も更なるリハビリテーションの質を高めるために，研究を継続し新たな知見を深めたい．		
写真添付欄 2 枚以内			

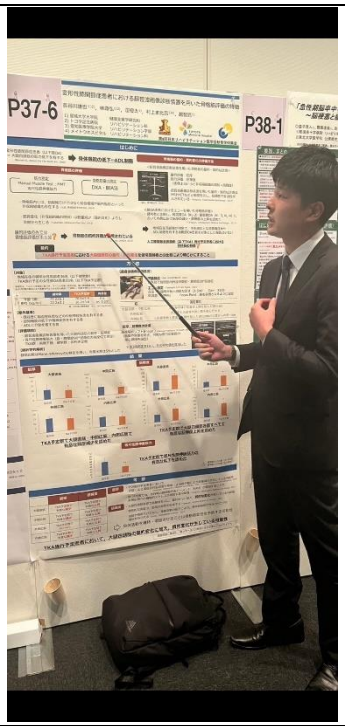
星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	令和 6 年 11 月 7 日(木)		
氏名	内屋　純	指導教員名	林　浩之
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）※いずれかにチェック			
学会等開催日：	令和 6 年 11 月 1 日～ 令和 6 年 11 月 3 日		
学会等名称：	第 8 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	岡山コンベンションセンター・岡山県医師会館・岡山国際交流センター・岡山シティミュージアム（岡山県岡山市）		
研究･講演タイトル：	術後早期より漸次静的装具を使用することによる肘関節拘縮予防の可能性		
発表者名（全員記載）：	内屋純[1)2)]，林浩之[1)3)]，桝田臣弘[2)]，富田晃弘[2)]，加藤彩菜[1)4)]，荻原響[1)4)]，棚橋宏行[5)]，横井達夫[5)] [1)] 星城大学大学院健康支援学研究科　[2)] 岐阜県総合医療センター中央リハビリテーション部 [3)] 星城大学リハビリテーション学部　[4)] 東海記念病院リハビリテーション部 [5)] 岐阜県総合医療センター整形外科		
研究概要 （150 字程度）	当院にて術後 12 週まで漸次静的装具療法を実施した肘関節周囲骨折患者において，術後早期より装具を使用した結果を後方視的に調査した．その結果，肘関節屈曲角度は術後 2 週から 12 週まで，伸展角度は術後 2 週から 6 週まで改善を認めた．肘関節周囲骨折患者において，漸次静的装具を術後早期より使用することは，拘縮を予防，改善する可能性がある．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	これまで肘関節周囲骨折において，術後早期から拘縮を予防するという観点では、装具療法は十分に検討されていない．本研究により，術後早期からの装具療法は拘縮を予防する可能性が示唆された．しかし，今回は比較対象がなく，漸次静的装具の優位性を確認できていない．今後は大学院での研究である動的装具群や装具未使用群などの対照群を設け，検討することに繋げていく．		
写真添付欄 2 枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 11 月 8 日													
氏名	村上ま比呂						指導教員名	越智　亮						
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）														
学会等開催日：	2024	年	11	月	1	日	～	2024	年	11	月	3	日	
学会等名称：	第 8 回日本リハビリテーション医学会　秋季													
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	岡山県　岡山市 岡山コンベンションセンター、岡山県医師会館、岡山国際交流センター、岡山シティミュージアム													
研究・講演タイトル：	地域在住高齢者と高齢入院患者におけるサルコペニア該当者の腓腹筋筋厚と身体機能の違い													
発表者名（全員記載）：	村上　ま比呂，越智　亮，林　尊弘、窪　優太，長谷川　雄也													
研究概要 （150 字程度）	本研究は，地域在住健常高齢者と，地域在住サルコペニア高齢者，入院患者の 3 群間において腓腹筋の筋厚と身体機能に違いがあるか調査をした．四肢骨格筋量は地域在住サルコペニア高齢者と入院患者で有意差は認められなかったものの，筋厚と身体機能では有意差が認められた．													
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	本研究から，同じ高齢者であっても地域在住と入院患者では大きく筋厚の差を認め，一日の活動量が影響することが考えられた．サルコペニア基準に該当している方は，四肢骨格筋量だけでなく、腓腹筋の筋厚が減少している可能性が高いことが示唆された．													
写真添付欄 2 枚以内	 													

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 11 月 3 日		
氏名	長谷川　雄也	指導教員名	越智　亮
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）			
学会等開催日：	2024　年　11　月　1　日　～　2024　年　11　月　3　日		
学会等名称：	第 8 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	岡山県岡山市 岡山コンベンションセンター		
研究･講演タイトル：	変形性膝関節症患者における超音波画像診断装置を用いた骨格筋評価の特徴		
発表者名（全員記載）：	長谷川　雄也，林　尊弘，窪　優太，村上　ま比呂，越智　亮		
研究概要 （150 字程度）	本研究は，変形性膝関節症と診断され，人工膝関節全置換術施行予定の患者を対象に，超音波画像診断装置を用いた骨格筋評価の特徴について地域在住健常高齢者との比較により明らかにすることとした．結果，変形性膝関節症患者では地域在住健常高齢者と比較して筋厚の減少・筋輝度の上昇が認められた．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	本学会では，人工膝関節全置換術後の身体機能等の予測に関する報告も多く，本研究の結果が今後、術後の身体機能等に影響を及ぼすか検討を進めていきたいと感じた．また，運動器疾患に限らず多くの分野において理学療法士としての役割や需要が高く，他職種連携の重要性を再認識することができた．		
写真添付欄 2 枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 9 月 16 日		
氏名	長谷川　雄也	指導教員名	越智　亮
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）			
学会等開催日：	2024 年 9 月 14 日 ～ 2024 年 9 月 15 日		
学会等名称：	第 12 回　日本運動器理学療法学会学術大会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	神奈川県　横浜市 パシフィコ横浜		
研究・講演タイトル：	人工膝関節全置換術患者における超音波画像診断装置を用いた骨格筋評価と身体機能との関連		
発表者名（全員記載）：	長谷川　雄也，林　尊弘，越智　亮，加古　誠人，中原　広志，鈴木　敦，尾崎　夏実，鈴木　篤明，桑原　浩彰，濱田　恭，酒井　忠博		
研究概要 （150 字程度）	本研究は，変形性膝関節症と診断され，人工膝関節全置換術施行予定の患者を対象に，超音波画像診断装置を用いた骨格筋評価と身体機能との関連について調査した．結果，筋厚は身体機能との関連を認めたものの，筋輝度は関連が認められなかった．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	本学会では，骨格筋評価に超音波画像診断装置を用いた研究が多くあった．筋輝度測定において，測定や解析方法について意見を頂けた．また特別企画セミナーでは超音波画像診断装置から得られる骨格筋評価に関する最新の知見を学ぶことができ，今後の研究活動に活かしていきたいと感じた．		
写真添付欄 2 枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 9 月 16 日		
氏名	野田 篤志	指導教員名	越智 亮
掲載内容（ ☒学会研究発表　☐講演講師　☐その他 ）※いずれかにチェック			
学会等開催日：	2024 年 9 月 14 日 ～ 2024 年 9 月 15 日		
学会等名称：	第 12 回日本運動器理学療法学会学術大会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	パシフィコ横浜		
研究・講演タイトル：	大腿骨近位部骨折患者の荷重非対称性に対する修正起立トレーニングの効果―パイロット準 RCT―		
発表者名（全員記載）：	野田 篤志，越智 亮		
研究概要 （150 字程度）	本研究では，大腿骨近位部骨折患者において，座面を高く患側足部を後方に位置させた起立トレーニングが荷重非対称性を改善させるかを検証した．座面を高く患側足部を後方に位置させた起立トレーニングは，患側健側足部を同位置とした起立トレーニングと比較して，起立時の荷重非対称性と患側膝関節伸展筋力およびバランス機能を改善させる傾向を示した．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	学会発表を通して，データ解析などの課題点を見出せた．今後は対象者数を増やして，さらなる解析を行い，結果を明らかにしていきたい．		
写真添付欄 2 枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 9 月 16 日		
氏名	村上ま比呂	指導教員名	越智　亮
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）			
学会等開催日：	2024 年 9 月 14 日 ～ 2024 年 9 月 15 日		
学会等名称：	第 12 回　日本運動器理学療法学会学術大会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	神奈川県　横浜市 パシフィコ横浜		
研究・講演タイトル：	地域在住高齢者と入院高齢者におけるサルコペニア該当者の腓腹筋筋厚の違い		
発表者名（全員記載）：	村上　ま比呂，越智　亮，林　尊弘，服部菜恵，篠崎裕也，岡村優奈		
研究概要 （150 字程度）	本研究は，高齢廃用患者の下腿三頭筋に対して局所振動刺激を適用し，筋肥大効果を促進させることができるか調査した．結果，超音波診断装置による筋厚の増大は認められたものの，その他筋力および日常生活動作への影響は認められなかった．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	本学会では，超音波診断装置を使用した筋機能評価の報告が多くあった．筋厚評価において，測定の位置や測定方法において意見をいただけた．また，今後の研究で超音波診断装置から得られる筋輝度や，Phase Angle なども注目してみていきたいと思った．		
写真添付欄 2 枚以内			

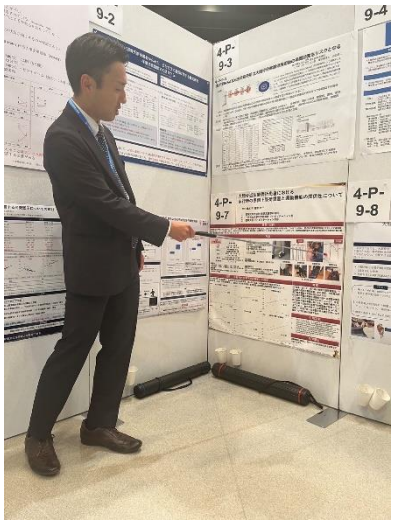
星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 8 月		
氏名	早川　佑治	指導教員名	坂井　一也
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）※いずれかにチェック			
学会等開催日：	R6　年　7　月　25　日　～　R6　年　7　月　26　日		
学会等名称：	第 13 回日本精神科医学会学術大会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	仙台市　仙台国際センター		
研究・講演タイトル：	ブラインド体験を用いた統合失調症に対する認知機能，対人関係改善に焦点を当てたプログラムの開発と検証（予備的研究）		
発表者名（全員記載）：	早川　佑治，坂井　一也		
研究概要 （150 字程度）	本研究では，統合失調症者に対し，認知機能，対人関係改善に焦点を当てたプログラムの開発と検証をした．介入群で，コミュニケーション力に改善傾向が見られた．また，認知機能では両群共に改善傾向が見られる結果となった．現時点で，対象者数が少ない為対象者数を増やし，今後も検証していく必要があると考える．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	まとめていく中で，至らない部分や課題点が明確になった．今後も対象者数を増やし，検証をさらに進めていきたい．また，今回明確になった課題点など見直し今後の研究に繋げていきたい．		
写真添付欄 2 枚以内			

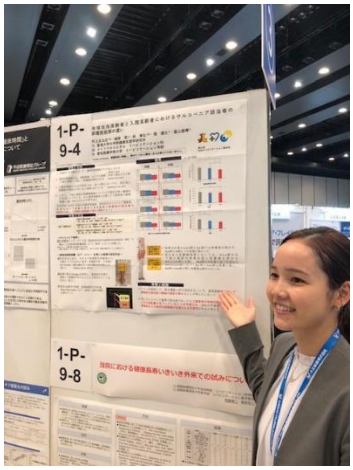
星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2024/7/01		
氏名	判治真也	指導教員名	越智亮
掲載内容（　☒研究論文採択　　☐総説論文掲載　　☐その他紀要など　）※いずれかにチェック			
論文採択・掲載日：	2024　年　5　月　8　日		
論文掲載雑誌名 巻・号・年	愛知県理学療法学会誌 36 巻 1 号 2024 年		
doi	http://aichi-npopt.jp/dl/info_paper_back/36_1_3.pdf		
タイトル：	後方転倒回避ステッピング中の下肢筋活動量と着地時姿勢の特徴		
発表者名（全員記載）：	判治真也　越智亮　太田大貴		
要旨 （250 字程度）	後方の転倒回避ステッピングにおける外乱刺激を増大させた際の下肢筋活動量と着地時姿勢の変化を調査し，バランス回復に寄与する下肢筋を明らかにすることを目的とした．健常男性若年者 13 名を対象とし，突然の牽引解放による後方ステッピングを行わせた（Tether-release 法）．牽引量は体重の 5%・10%・15%とし，動作中の下肢筋活動の測定，ステッピング着地時姿勢の評価を行った．ケーブル牽引量の増大に応じて，振出脚の半腱様筋と大腿直筋および前脛骨筋，支持脚の大殿筋と大腿直筋および前脛骨筋の筋活動量が有意に増加した．活動量が増加した筋が後方への転倒回避ステッピングに関与する筋であると考えられた．		

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 6 月		
氏名	野田 篤志	指導教員名	越智 亮
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）			
学会等開催日：	2024 年 6 月 13 日 ～ 2024 年 6 月 16 日		
学会等名称：	第 61 回日本リハビリテーション医学会学術集会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	セルリアンタワー東急ホテル，渋谷ヒカリエ		
研究・講演タイトル：	大腿骨近位部骨折患者における歩行時の患側下肢荷重量と運動機能との関係性について		
発表者名（全員記載）：	野田 篤志，越智 亮		
研究概要 （150 字程度）	本研究では，大腿骨近位部骨折患者における歩行時の患側下肢荷重量と運動機能との関係性を検証した．歩行時の患側下肢荷重量は起立時の患側下肢荷重量，立位保持時の患側下肢荷重量と中等度の正の相関を認めた．また，疼痛，関節可動域，筋力とは有意な相関関係を認めなかった．今後は，対象者数を増やし因果関係について検討していく．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	学会発表を通して，データ解析や統計学的分析などについての課題点を見出せた．今後は，解析方法などを見直して対象者の病態や特性などを明らかにし，介入研究に活かしていきたい．		
写真添付欄 2 枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 6 月 17 日		
氏名	村上ま比呂	指導教員名	越智　亮
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）			
学会等開催日：	2024 年 6 月 13 日 ～ 2024 年 6 月 16 日		
学会等名称：	第 61 回日本リハビリテーション医学会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	東京都　渋谷区 セルリアンタワー東急ホテル，渋谷エクセルホテル東急，渋谷ヒカリエ		
研究・講演タイトル：	地域在住高齢者と入院高齢者におけるサルコペニア該当者の腓腹筋筋厚の違い		
発表者名（全員記載）：	村上　ま比呂，越智　亮，林　尊弘、窪　優太，冨山　直輝		
研究概要 （150 字程度）	本研究は，地域在住健常高齢者と，地域在住サルコペニア高齢者，入院患者の 3 群間において腓腹筋の筋厚に違いがあるか調査をした．筋骨格筋量指数は同程度であっても，入院患者は他の 2 群と比較して有意な筋厚の減少を認めた．下腿三頭筋は遅筋線維を多く含む筋であり，一日の活動量が筋厚に影響すると考えられた．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	本研究から，同じ高齢者であっても地域在住と入院患者では大きく筋厚の差を認め，一日の活動量が影響することが考えられた．入院するだけで活動量が低下することを改めて痛感し，臨床場面において必要な運動を検討していく必要があると思った．また，自身の研究の発展につながる様々な視点からの質問や意見をいただけた．研究内容を見直し，次の研究に向けて進めていきたい．		
写真添付欄 2 枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 6 月 11 日		
氏名	野田 篤志	指導教員名	越智 亮
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）			
学会等開催日：	2024 年 6 月 8 日 ～ 2024 年 6 月 9 日		
学会等名称：	第 28 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	長崎大学医学部医学科坂本キャンパス 1		
研究・講演タイトル：	大腿骨近位部骨折患者における患部疼痛と患側下肢荷重量との関係性		
発表者名（全員記載）：	野田 篤志，越智 亮		
研究概要 （150 字程度）	本研究では，大腿骨近位部骨折患者における患部疼痛と患側下肢荷重量との関係性を検証した．歩行時の患部疼痛は歩行時の患側下肢荷重量との間に中等度の正の相関を認めた．歩行時の患部疼痛が無い者では，術後における患側下肢の荷重制限により患側下肢荷重量の低下を認めた者が散見された．今後は対象者を増やし，さらなる検討が必要である．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	学会発表を通して，データ解析や統計学的分析など多くの課題点を見出せることができた．今後は，研究結果を見直し，対象者の病態や特性などを明らかにしていきたい．		
写真添付欄 2 枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2024 年 6 月 6 日		
氏名	村上慈葉	指導教員名	太田進
掲載内容（　☒研究論文採択　　☐総説論文掲載　　☐その他紀要など　）※いずれかにチェック			
論文採択・掲載日：	2024 年 5 月 14 日		
論文掲載雑誌名 巻・号・年	Gait & Posture		
doi	10.1016/j.gaitpost.2024.04.037		
タイトル：	Effects of gait intervention using the draw-in maneuver on knee joint function and the thoracic kyphosis angle in knee osteoarthritis		
発表者名（全員記載）：	村上慈葉，太田進，藤田玲美，大古拓史，川崎慎二		
要旨 （250 字程度）	【目的】 短時間の Draw-in maneuver（DI）歩行指導で膝関節内転モーメント（KAM）が減少するか，変形性膝関節症（膝 OA）症例に対する DI 歩行介入による膝関節機能への効果を検証した. 【方法】 研究 1: 健常成人に対し DI 歩行指導と自己練習を各 10 分実施した. 研究 2: 膝 OA 症例に対し 1 日 20 分間の DI 歩行介入を 6 週間行った. 【結果】 研究 1: 10 分間の指導と自己練習後、KAM が減少した. 研究 2: 6 週間後に膝痛が 19%減少し，胸椎後弯角度が 2.6°減少した. 【考察】 健常成人は，10 分間の指導と自己練習で，DI 歩行の習得が可能であると考えられる．膝 OA 症例では，1 日 20 分の DI 歩行を 6 週間継続することで，膝痛と胸椎後弯角度が減少する可能性がある.		

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 5 月 25 日(土)												
氏名	榛地佑介						指導教員名	大田進					
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）※いずれかにチェック													
学会等開催日：	2024	年	5	月	19	日～	2024	年	5	月	19	日	
学会等名称：	第 32 回愛知県理学療法学術大会												
学会等開催場所：国名，都市名，会場名	愛知県名古屋市　ウインクあいち												
研究･講演タイトル:	前十字靭帯再建術後抜釘術時における膝関節軟骨変性の進行と歩行対称性の関連について												
発表者名（全員記載）:	榛地佑介　安井淳一郎　太田進												
研究概要（150 字程度）	先行研究において前十字靭帯再建術後の異常歩行は変形性膝関節症の発症に関連すると報告されている．本研究では再建術後抜釘時の膝関節軟骨変性進行と歩行対称性の関連について検証した．結果は，軟骨変性進行あり群は歩行対称性は保たれていたが，左右の動揺が大きいという結果となった．今後は時系列や関連因子についてさらに詳細な検証が必要である．												
感想その他アピール欄（100 字程度）	質問を複数いただくことができ、今までの発表よりも自身の考えを時間内でまとめることはできたように感じた．聴講者からも時系列での特徴について質問を頂いたため，その部分も明らかにしていき次につなげていきたい．												
写真添付欄 2 枚以内													

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（論文掲載版）

報告日	2024/5/28		
氏名	石野晶大	指導教員名	山田和政
掲載内容（　☒研究論文採択　　☐総説論文掲載　　☐その他紀要など　）			
論文採択・掲載日：	2024　年　3　月　29　日		
論文掲載雑誌名 巻・号・年	理学療法学　早期公開日：2024/5/25		
doi	https://www.jstage.jst.go.jp/article/rigaku/advpub/0/advpub_12466/_pdf		
タイトル：	回復期リハビリテーション病棟に入退棟した低栄養リスクを有する脳卒中患者における栄養状態の推移の実態と日常生活動作改善度への影響		
発表者名（全員記載）：	石野晶大　山田和政　牧芳昭		
要旨 （250 字程度）	本研究は ADL 改善度に GNRI の推移が与える影響を検証することを目的とした．対象は低栄養リスクを有する脳卒中患者 328 名とした．調査項目は入棟時の基本属性，身体機能・能力，GNRI の推移とした．GNRI の推移は入棟時から入棟 2 ヶ月時の GNRI の臨床的に意味のある最小差（MCID）を算出し，MCID と GNRI のカットオフ値に基づき 4 群に分類した．解析は多重比較検定と目的変数を ADL 改善度とした重回帰分析を行なった．その結果，ADL 改善度は GNRI が向上した群と比較して，維持群，低下群でいずれも有意に低値であり，GNRI の推移は ADL 改善度に影響した．栄養状態が維持もしくは低下した症例は良好な ADL の改善が得られず，入棟期間中の栄養状態の推移に留意し，栄養状態の向上を図る栄養管理の重要性が示唆された．		

星城大学大学院健康支援学研究科　研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2024 年 1 月 31 日		
氏名	村上ま比呂	指導教員名	越智　亮，林　尊弘
掲載内容（　☒学会研究発表　　☐講演講師　　☐その他　）			
学会等開催日：	2024 年 1 月 26 日 ～ 2024 年 1 月 27 日		
学会等名称：	日本物理療法合同学術大会 2024		
学会等開催場所： 国名，都市名，会場名	奈良県　奈良市　　奈良コンベンションセンター		
研究・講演タイトル：	局所的振動刺激を併用した下腿三頭筋の筋厚と筋特性の即時的変化		
発表者名（全員記載）：	村上　ま比呂，越智　亮，林　尊弘、宇佐美　雄斗		
研究概要 （150 字程度）	本研究は，地域包括ケア病棟に入院中の廃用性筋萎縮高齢患者を対象に，局所的振動刺激を併用した起立・立位保持運動の筋肥大効果について超音波診断装置を用いた筋厚の即時的変化を調査して検証した．振動刺激なしの起立のみの群と，振動刺激ありの群の 2 群間で，筋厚の即時的変化率の差は有意でなく，振動刺激併用起立トレーニングの筋肥大効果を明らかにできなかった．対象者数を増やし，長期的な介入の効果を引き続き研究していきたい．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	本学会において，振動刺激の適用例の講演を拝聴した．その中で，褥瘡治療に用いて一定の効果が得られた報告があり，振動刺激を扱う研究を進めていくうえで知見が増え，またその効果における生理学的なメカニズムも学ぶことができ，とても良い機会になった．自身の研究の発展につながる様々な視点からの質問やご意見をいただけた．物理療法学を専門とする理学療法士の先生方や企業の方と交流ができた．次の研究に向けて邁進していく所存である．		
写真添付欄 2 枚以内			